

## レファレンス事例データベースと OPAC の連携

山本 一喜

国立国会図書館が運営するレファレンス協同データベースには、さまざまな図書館によるレファレンス事例データが蓄積され提供されている。それら事例データには、利用者からの質問内容に加え、調査・回答のプロセスや参照された資料等が記録されている。調査・回答に用いられた参考資料の記載は、信頼性のあるデータとするためには不可欠である。しかしながら、現状では回答に使用された資料等の記載には揺れがみられ、同じ資料を使っている場合でさえも、その事例記録者による様々な記載方法での記述がなされている。

本研究ではレファレンス協同データベース内のレファレンス事例と NDL OPAC による図書に対するメタデータの二種類のデータ群を API を利用して入手し、(1) レファレンス事例データの参考資料欄に記載された資料に対して、NDL OPAC データを用いた同定、(2) NDL OPAC データから、当該資料に対する記載を参考資料欄に含むレファレンス事例データの発見と同定を試みるシステムを作成した。なお、今回は NDL OPAC データを利用する関係上、同定する対象資料は図書に限定した。このシステムにより、レファレンス事例データベースにおける同一資料発見の困難性の解消、さらには利用者に対する OPAC データ単体でのサービス不足の解消を試みる。

試作したシステムは、検索画面で検索語を入力すると、その検索語を用いたレファレンス事例と資料に対する検索結果をリスト表示する。その後、表示されたレファレンス事例もしくは資料の詳細表示へのリンクをクリックすると、レファレンス事例の詳細表示には、参考資料を同定するためのリンクが、資料の詳細表示には、参考資料欄に当該資料を含むレファレンス事例を検索するためのリンクを作成する。検索と同定のためのキーとしては、ISBN 等の識別子とタイトル、出版年を利用する。

(1) の機能に関しては、一部同定できない例があった。今回同定できなかった資料に関して、ほかの方法を今後検討しなければならない。(2) の機能に関しては、出版年の未記載と、NDL OPAC メタデータとレファレンス事例の参考資料欄との記載資料の記述のずれにより同定の不具合が発生した。

なお、本システムは、一般的な OPAC とは大きく異なり、検索されたデータの表示によりシステムが終了することはない。これが本研究での OPAC データ単体でのサービス不足という問題に対する回答である。

他方、本研究で不足している部分として、評価実験の実施、本システムで同定できなかった資料群に対する詳細な分析が難しいことがあげられる。

(指導教員 谷口祥一)